

学校だより

年頭所感

おもてなしの心は和の文化から

あけましておめでとうございます。今年の正月、三が日は、穏やかな晴天に恵まれましたが、いかがお過ごしでしたか。子年、オリンピック・イヤーの年となりました。7月7日には、聖火リレーが狭山市を駆け巡ります。次代を担う子供たちにとって、この祭典が夢と希望を与え、イベントだけに留まらずに、是非、オリンピックを契機に自国のよさを再認識し、迎える諸外国の方に和や郷土のよさが伝えられると良いと思っています。その際、狭山が誇る郷土の味、「狭山茶」でおもてなしをし、お茶を通じて和の文化が発信できれば素晴らしいことだと思いますが、いかがでしょうか。

さて、年末年始は、家族と過ごす時間が多く、正月は、初詣、しめ飾り、おせち、七草がゆ、賀状など、古くから伝わる風習等に接する機会が多かったことでしょう。普段は静寂な佇まいの入間野神社や野々宮神社も、三が日は、一年の願いを祈願する初詣で賑わったのではかと思えます。



しかし、時代の変化と共にこうした正月文化も様変わりしてきました。せめて正月は、おせちを囲んで家族との団らんや賀状での新旧の友人・知人からのたよりを楽しみたいものですが、少子化や情報メディアの発展の影響は、家庭での正月の様相をも変えることとなり、何となく切なく感じました。そんな中、4日の新聞に、掲載された「現代迎春」の年賀状の記事が目にとまりました。私が子供の頃は、親から「お世話になった先生に賀状を出しなさい」と言われ、下手な字と絵を描いて、送ったものです。また教員になってからは、クラスの生徒全員に賀状を送ったり、年賀状コンクールをしたこともありました。しかし、近年は個人情報保護のため、住所等を教え合うことさえ難しいこととなりました。また、ネットの普及や終活ブーム(賀状じまい)など、さらにはSNSの普及で「スクショ年賀状」や、LINEでの新年の挨拶はスタンプひとつで済ませることを味気ないと感じるのは古い考えなのでしょうか。今や一度も賀状や手紙を書かない、また書き方もわからないまま大人になる生徒もいるのではないかと先行きを心配しています。我が国は、年頭には、元々、祝賀を交換する習わしがあり、年賀のために元旦に年始回りをした際、各家庭でもてなしをする風習がありました。そして、年賀に行けない人が、挨拶を手紙に書くという習慣が年賀状のはじめだと伝えられています。会いたくともすぐには会えない、また普段お世話になっていても改めて礼を尽くすことができない、だからこそ年に一度限りであっても、文字で挨拶を交わすこと、これも世界に誇る「和の文化」だと思います。オリンピックでのおもてなしは、こうした「和の文化」を大切にすることからはじまるのではないのでしょうか。皆様にとって令和2年が素晴らしい年となることを願っています。